

フォスター+パートナーズ

「ナルボ・ヴィア州立考古学博物館」Narbonne, France

設計=フォスター+パートナーズ

参照 | 本誌pp.2-19

フランチェスコ・ダルコ

19世紀末にフォロ・ロマーノの発掘調査——これにより現在にはほぼ近い状態になった——の総指揮を任せられたジャコモ・ボーニは、当時の考古学は「地下世界を敵地と見なして破壊する行為」だったと述べた。今日、物事は大きく変化している。しかしながら、地中に保存されているものの実質は変わっていない。この予期も予測もできないものは、1929年にフロイトが書いたように、「その時点までの退行などの、ふさわしいきっかけがあれば、蘇らせることができる」ため、考古学遺跡を心の領域になぞらえるのも納得がゆく。遺跡も人の精神も「同じように長く、豊かな過去を持ち」、そこで「ひとたび形成されたものは滅びることがなく、すべてのものが何らかの形で保持される」[フロイト「文化への不満」、1930 | 邦訳書:中山元訳、光文社古典新訳文庫、2007]。これと似た機構を再現し、何らかの「装置」を使って、過去への退行の力学を表現することは可能であろうか? これは、2015年から2021年にかけてフォスター+パートナーズがナルボンヌに建設したナルボ・ヴィア州立考古学博物館を取り上げるにあたり、われわれの頭に浮かんだ問いである。ナルボ・マルティウス(現在のナルボンヌ)は紀元前118年に古代ローマ人により建設された。同地は、ローマとスペインを結ぶドミティア街道と、大西洋に抜けるアキタニア街道の交差点である。紀元後400年以降は、西ゴート族、サラセン人、フランク族が次々と同市を支配した。ナルボンヌ市内と周辺地域で出土す

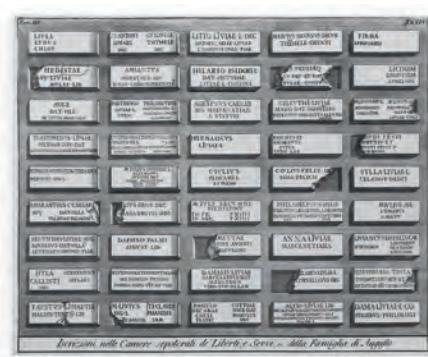


正面全景

る考古学的遺物の多様性はこれに起因し、また多くの建築物に組み込まれた。ナルボ・ヴィア博物館にはナルボ・マルティウスの歴史が記録され、これまで他の博物館や石碑美術館にあった彫刻、石碑、建築の断片、絵画、モザイク、道具類が集められている。

建築家たちに委ねられた土地は約22,000m²で、博物館の屋内面積は約9,000m²である。それほど高くないう基壇の上に置かれたヴォリュームは、長方形(91×86m)の輪郭をもち、2つに分かれている。全層吹き抜けの一体的な空間が建物の長軸に沿って伸び、研究調査スペースおよび付属研究室のあるヴォリュームと、展示スペース、

レストラン、オーディトリアム、諸設備のあるヴォリュームとを分けている。中央スペースに展示設備が置かれ、建築家たちがシェルを簡潔に造形したにもかかわらず、建物全体は表情豊かである。デザインの狙いは、彩色した壁と、主梁とその上の屋根の張り出し——外壁に沿った支柱のないポルティコとなる——から生まれる効果である。中央部の展示設備は長さ70m、高さ10mのスティール棚で構成される。重厚な壁体に嵌めこまれたガラス壁を通して、屋外でも斜め方向からこの展示棚を鑑賞できる。館内では、支柱と棚板の間に空間があるため、来館者は棚の背後に並ぶ研究室の様子を知ることができる。



G·B・ピラネージ:「アウグストゥス家の解放奴隸と奴隸の墓室の碑文」『古代ローマ』第3巻、1756



平面図



断面図



ボルティコを巡らせた外周部



エントランス・ホール

棚板には出土品が置かれている。石碑の断片は、展示棚の幅に等しい長さの連続したトップライトから照らされて、一面の石積み壁をつくっている。漂流物のようなこれら遺物は、明らかに、ピラネージが「アウグストゥス家の解放奴隸と奴隸の墓室の碑文」に描いたものと同等の幾何学形態を帶びてはいないが、素材の性質は共通する。リウイア・アウグスタの墓室から発見された墓石群の一部も切断されていた。本来の状態に復元することにより、ピラネージは頭上からの光と、いくつかの石が切断されたことにより生まれた影の戯れをうまく利用し、彼が描いたものはすべて石壁に嵌めこまれたことを強調した。ナルボ・ヴィアの「石碑の壁」が生み出す視覚的効果もこれとよく似ている。この展示解決策の狙いは、来館者が一

種の石碑工房を訪れたと感じるよう、遺物を積み上げてその漂流したばらばらの状態を見せることにある。さらに、展示棚の裏側に設置された手動リフトを使えば、研究者の必要に応じて展示棚に置かれた石片を移動したり配置替えたりできる。一方、来館者は貸し出されるデジタル・スクリーンを使って、展示方法の選択に参加できる。出土品それぞれが呼び起こす多様な要求に基づいて、「ひとたび形成されたものは滅びることがない」と主張しながら、展示物の配置を断続的に変えられるデザインは、精神的な退行とあらゆる考古学的発見が意味を獲得するプロセスと結びつけるアナロジーの、機械仕掛けを使って実現された翻訳のようである。

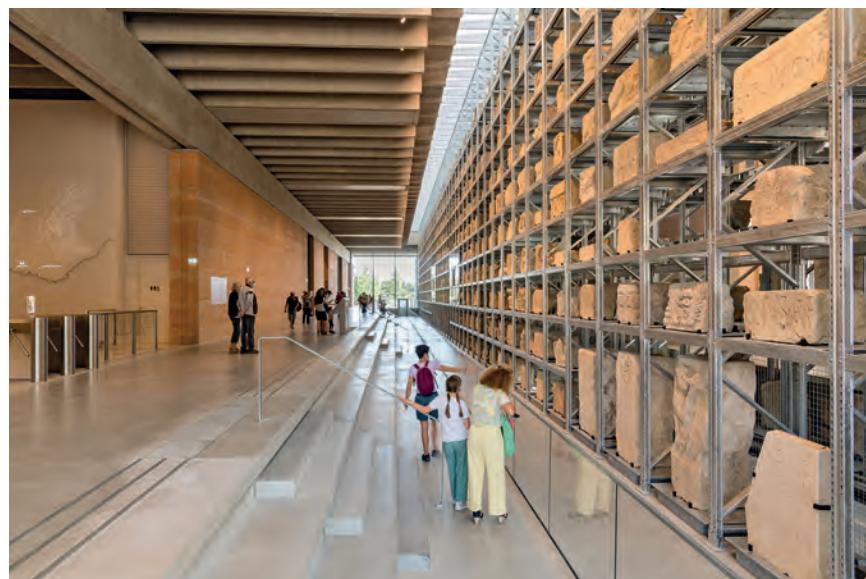
建物の主梁の骨組みは、流通部材を使った副梁の骨

組みを支えている。主梁はコンクリート壁にじかに載っているが、この壁には耐力機能を補う部材は組み込まれていない。壁は適量の水を加えて圧力をかけたモルタル・セメントで造られ、地元産の細かい骨材が加えられている。骨材のさまざまな色彩により、建物の外被は地層の積み重ねのような外観を帶びた。この積層は、建築家たちが決めた「地中海的」色彩と溶け合い、ボリュームに高い断熱性能を与える。コンクリート壁のマスと相対的に抑制されたガラス壁の組合せにより、建物に高いエネルギー性能を保証している。公衆に開かれたウイングでは、屋外アトリウムに面した4つの部屋で、かつてナルボ・マルティウスで営まれた生活が多角的に解説され、庭園に面したペリスティリウムで閉じられる。最も代表的な出土品が集められた展示室では、仕上げのクオリティと施工の正確さがはっきりと見て取れる。それは博物館全体の特徴であるとともに、フォスター+パートナーズが設計する作品の常に変わらない性質である。

作品:ナルボ・ヴィア州立考古学博物館

設計:フォスター+パートナーズ

設計チーム:Norman Foster, Spencer de Grey, David Nelson, Grant Brooker, Andy Bow, Hugh Stewart, Francois Curato, Angelika Kovacic, Piers Heath, Roger Ridsdill-Smith, Filippo Bari, Trevor Barrett, Ariadna Barthe Cuatrecasas,

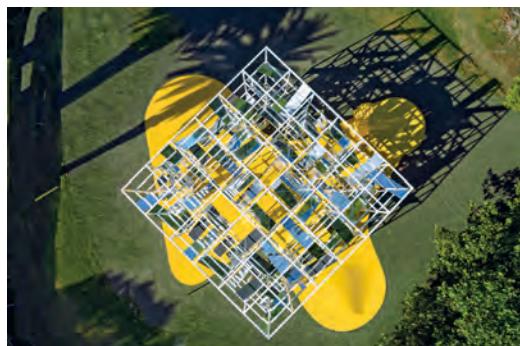


中央スペース:右に「石碑の壁」を見る



展示室より中央スペースを見る

フランシス・ケレ



上空より見る



人々が集う様子

能である。ここで挙げておきたいのは、100×5mmのステール・パイプをつなげる最良の溶接方法の研究、内側の連結補強部材の位置の検討、溶接の必要な構造部材の決定と組立工程の計画である。こうして、工場から敷地に運ばれたパヴィリオンは、わずか5作業日で組み立てられた。2022年4月4日にヴィクトリア・ガーデンズの舞台からフットライトが消えた後は、同じく容易に解体され、メルボルン市内のふさわしい場所で20年の期間「舞台に」戻るまで、一時的に待機する予定である。

作品: Mパヴィリオン 2021

設計: MAPスタジオ——Magnani Pelzel Architetti Associati

設計チーム: Francesco Magnani, Traudy Pelzel

協働者: Gabriele Martella, Matteo Sirinati

ローカル・アーキテクト: Sean Godsell architects

構造: Aecom AUSTRALIA, Nigel Bourdon, Robert Macaulay

施工: Schiavello Construction

建築主: Naomi Milgrom Foundation | 規模: 延床面積 150m²

スケジュール: 設計 2019-20年 / 施工 2021年

所在地: Queen Victoria Gardens, Melbourne, Victoria, Australia

「ライオンズ・キャンパス」 Turkana, Kenya

設計: フランシス・ケレ / ケレ・アーキテクチャー

参照 | 本誌 pp.78-85

マルコ・ビアージ

ラーニング・ライオンズはドイツを本拠とする非営利組織(gUG/公益的有限責任事業会社)で、インターネットを使って寄付とボランティアを集め、アフリカ農村部に住む青年に向けて職能教育と職業訓練の支援活動を進めている。ケニア北西部の、首都ナイロビから自動車で2、3日かかるトゥルカナ湖周辺のように都市から離れた地域は、物資とインフラストラクチャーが欠如しており、痩せた土地と市場への限られたアクセスゆえに、住民は貧困と発展途上の状態を強いられている。後進的で不利な環境において、ドイツのNPO団体が推進する支援プログラムは、情報・コミュニケーション技術とテレワークの促進を進めることにより、短期間で所得をつくり出し、世界規模で企業活動の機会を鼓舞することを狙っている。その点で、カロコルとカタボイの間に位置する半砂漠のカリマプス高地に、昨年4月に完成したばかりの新しいスタートアップ・ライオンズ・キャンパスは、重要な投資であり、人道支援活動の目的を強化する決定的な施設を体現する。ブル

キナファソ出身の建築家ディエベド・フランシス・ケレの事務所が設計した新キャンパスは、専門教育の拠点かつ企業のインキュベーターである。この教育施設では、基礎教育課程の修了時に選抜された優秀な学生たちに、快適な設備が整えられた教育とコワーキングの空間を提供している。これにより教育研修期間を終えた学生たちは、公正で連帯的なビジネス・ソフトウェア・プログラミング、グラフィック・デザイン、オーディオ/ビジュアル制作の諸分野で最初のオンライン・ビジネス計画を体験するのである。キャンパスはランドスケープを考慮し、トゥルカナ湖の方向に広がる斜面に合うよう開かれた配置とされた。3つの2階建てのメイン・ボリュームが段丘に配置され、ブリッジや外付け階段で連結されている。使われた素材は地元で採掘された石材で、土地と同じ赤色のプラスター仕上げで統一されている。歩くことのない傾斜屋根も赤く塗られた。一方、段状の屋根にはスチールのパーゴラが架けられ、これを支柱に将来的に植物が伸びて、日除けの機能をもつ緑のカーペットとなる。簡潔で厳格な建築のフォルムは、装飾やフォーカロアに譲歩する姿勢を見せないが、3本の換気塔では、伝統的に用いられてきたパッシブな熱交換の仕組みを形態的特徴として採用している。換気塔は、床面の通気孔と周壁の空気層を介して室内の空気を循環させ、大気を冷



全景: 斜面下方より見る

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2022 Arnoldo Mondadori Editore

©2022 Architects Studio Japan

却すると同時に、情報通信機器を損傷しかねない砂塵の吹込みを防ぐ。

作品:ライオンズ・キャンパス

設計:ディエベド・フランシス・ケレ/ケレ・アーキテクチャ

設計チーム:Kinan Deeb (responsable), Andrea Maretto

構造・設備:BuildX Studio | 施工:BuildX Studio

建築主:Learning Lions gUG

規模:建築面積 1,416 m²

スケジュール:設計 2019年5月-12月/施工 2020年12月-21年4月

所在地:Turkana County, Kenya

【補遺】

ディエベド・フランシス・ケレ(Diébédo Francis Kéré)氏が、2022年のプリツカーラー賞を受賞した。アフリカ出身の建築家では初の受賞者となる(国籍はブルキナファソとドイツの双方)。

フランシス・ケレは1965年に、世界の最貧国のひとつであるブルキナファソに生まれた。飲料水にも事欠き、電気などのインフラ整備も遅れており、教育水準も最低レベルだと言われている。出身地ガンドには学校がなかったが、教育熱心な両親は彼に学業を続けさせた。1985年に奨学金を得てベルリンに渡り、中等教育を受けつつ家具製作などの訓練を受けている。1995年にはベルリン工科大学に入学し、2004年に建築の学位を得て卒業した。その学生時代に設計

した故郷ガンドの小学校(2001)によって、アガ・カーン建築賞(2004)を受賞している。それを契機としてケレ・アーキテクチャをベルリンに設立(2005)した。以降、ベルリンを拠点にして、母国ブルキナファソを始めとしたケニア、モザンビーク、ウガンダなどのアフリカ各地で、教育や医療に関連した施設を次々と実現させている。現在はアフリカ諸国にとどまらず、ドイツ、イタリア、デンマーク、イギリス、アメリカなどにも活躍の場を広げている。さらに近年は、ハーバード大学やイェール大学、ミュンヘン工科大学などにおいて、建築教育にも携わっている。

-

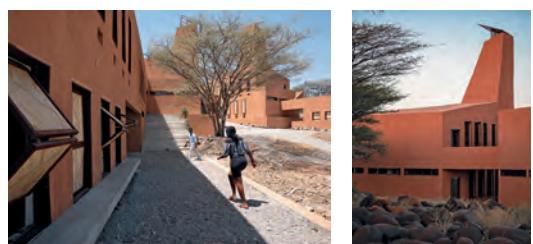
今回紹介した「ライオンズ・キャンパス」は、ケレが自身の経験から獲得してきた建築的コンセプトの軽やかな実現と読み取れる。これは情報・コミュニケーションの先端技術を学ぶキャンパスであるが、首都ナイロビから車で2日以上かかる辺鄙な農村に建てるプロジェクトだ。資金も建設技術もない。地元の石材を積み上げて、土地の色に似せて赤く塗る。電力消費を最小限に抑えるため、屋根を二重にし、3本の換気塔で熱を放出し、屋上にはパーゴラを架け渡す。土地のヴァナキュラーな建築的要素は、換気塔にシンボルとして残す程度で、全体として現代的な造形で組み上げている。

先進国での省エネやエコの軽々な議論が吹っ飛ぶほどの、本物のサステイナビリティの実現。彼の建築から学ぶことは、想像以上に多いだろうと感じている。まさに「建築とは何か」という深いテーマに肉薄しているのではないだろうか。

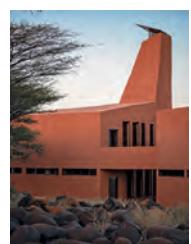
小巻哲[CBJ監修者]



南側外観



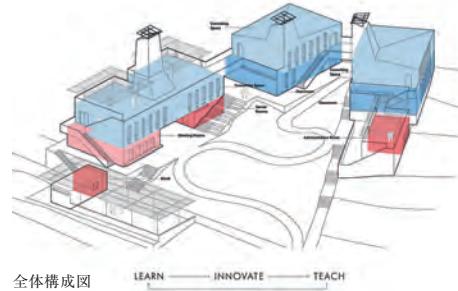
教室への通路



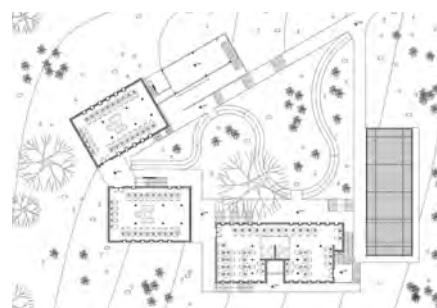
西側外観:
赤色ブランスターによる仕上げ



東側全景:中庭方向を見る



全体構成図 LEARN INNOVATE TEACH



各階平面図



断面図

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2022 Arnoldo Mondadori Editore

©2022 Architects Studio Japan

マヌエル・ヘルツ

「小児病院」Tambacounda, Senegal

設計=マヌエル・ヘルツ・アーキテクツ

参照 | 本誌 pp.86-93

カミッロ・マーニ

セネガルのタンバクンダ病院の増築は、多くの人々の努力と情熱の結晶である。何よりもまず、ヨゼフ＆アニ・アルバース財団はNGO団体ル・コルサとともに、2005年から教育、芸術、衛生の諸プロジェクトを通じて地元共同体の支援に尽力している。次は建築家である。2015年に日本人建築家の森敏子が、サンシアン村のアーティスト・レジデンス建設プロジェクトを無償でアルバース財団に提

供し、国際的な建築批評の関心を集めたように、マヌエル・ヘルツはタンバクンダ市の老朽化した病院を増改築するために労力を提供した。最後は共同体である。現地スタッフと村の職人たちの類まれな協働のおかげで、ヘルツは戦略的に重要で、マリまで含む広大な地域から集まる年間約2万人の患者に、衛生援助を行える建物を実現することができた。

建物はフォルムの独創性が目を引く。2階建てで奥行きが7mのボリュームが、S字を描きながら伸びて、既存の建物の間に横たわる。配置とタイポロジーの選択はプロジェクトの質を担保する手段である。空間構成の単純さは病院機能の組織化に有益に働き、1階は小児科、2階は産科に当てられた。通路により患者の動きが方向づ

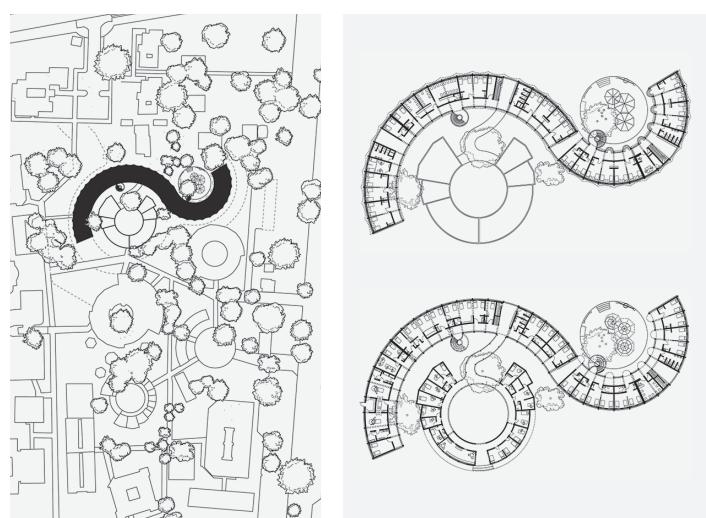
けられ、病室は一方向を向くよう配置された。一方、2ヶ所の外付け螺旋階段により、上下階の連絡ができる。ボリュームの奥行きを減らすことによりクロス換気の効率を上げ、どの部屋も直接外気が入る。さらに、二重のボルト屋根は下層がコンクリート、上層が波板で造られ、風通しの良い中空層で分けられている。この屋根が太陽の輻射効果から内部空間を守っている。特に注がれたのは、工法である。外壁は、マシュラビーヤと呼ばれる、自然換気を促すため窓の代わりにつけられる伝統的な格子スクリーンを想起させる。この外壁に使われる有孔煉瓦は、規則的な四角い外枠の内側に円形の金属製抜き型を入れ、手作業で作られた。こうした技術的工夫の総体により院内の快適さが向上し、空調機器に



上空から見た夜景



空からの全景



配置図

1、2階平面図

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2022 Arnoldo Mondadori Editore

©2022 Architects Studio Japan